

上ノ原ものがたり

戦前から戦後にかけて、藤原は秘境でした。山をひとつ越えるとそこは新潟、積雪2mを超す豪雪地帯です。しかし藤原は自給自足ができました。まがりなりにも米がとれ、炭焼き、植林や伐採、ワラビ粉(糊)採り、山菜採りやキノコ採り、養蚕(原蚕飼育)なんかが当時の仕事でした。

■上ノ原 220町歩の入会地

家近くの里山には、個人の山や農地がありました。でも、家を作る材木、薪や炭、屋根をふく茅、馬の飼料、肥料にする草や落ち葉などは、個人の土地だけでは間に合いません。地域の持続的な生活のためには、広大な入会地(共用地)が必要でした。

藤原には、「上ノ原」「宝台樹」「樺山」などいくつかの茅場がありました。中でも上ノ原は広大でした。明治6年に官有地になってからも、入会利用は自由でした。上ノ原219町6反9歩は大正10年、1万5028円で当時の水上村に払い下げられました。

■茅刈りは屋根用を最優先

上ノ原の利用でいちばん重要なのが茅刈りです。屋根用を優先し、そのあと炭俵、養蚕のかやまぶし、家屋の冬垣のための茅を刈りました。屋根替えをしようという家は、あらかじめ什長(区長)に申し入れをしておく、その家の茅の確保が優先されます。茅刈り、茅出し、そして翌春に行われるヤネコボシ、ヤネフキは村中の人のエエ(結い)です。出られない人はワタマシといって穀類とお金を出しました。茅刈りの日は8月の区長たちの寄合でだいたいの日を決めました。

茅場では春早く、雪の消え間の様子を見ながら火入れが行われました。茅と山菜の出が良いようにと、什長が中心になって毎年やっていました。その火入れも、昭和40年ごろが最後でした。

茅場では、ワラビ、ゼンマイ、フキ、ウドなどの山菜採りも行われました。秋から春にかけてはワラビの根、クズの根掘り(カズラ掘り)がありました。馬の飼料にする萩採りは、秋の彼岸明けが口明けでした。戦後の食糧難の時代、茅場の一部を焼いてソバやアワ、ヒエを作ったこともあります。「カンノ」と言って、いわゆる焼き畑でした。



■変わる入会地と人

入会地はやがて、レジャー施設などへと姿を大きく変えていきます。上ノ原は昭和50年、その大部分がゴルフ場になり、宝台樹山はキャンプ場やスキー場に、樺山は今は自然林となっています。スキー場は一時期たくさんの人を藤原へ呼び込みましたが、現在のスキー客は最盛期の3分の1です。

藤原の山林原野は荒れています。木を切り再生することで山は維持されてきたのですが、今はそれがありません。そこで私たち藤原の中高年は「田園空間構想委員会」を作り、共有のもの、共有地の新しい使い方を考えようと活動を始めました。共有地の「雨呼山」に遊歩道を作ったのもそのひとつです。

森林塾青水の「コモンズ」活動にも期待しています。その活動を地域の人が見て、若い人のなかに新しい動きが出てくることを期待しています。入会地をどうするかは藤原をどうするかです。すでに手遅れかもしれませんが、私たちの頑張りを若い世代に見せ、将来はやはり若い人に託したいと思うのです。(話:2004年7月・林好一さん)

*

森林塾青水は2003年(平成15)、水上町(当時)から上ノ原21町歩を借り受け、茅場の再生を目指して活動を始めました。翌04年、水上町(当時)や藤原の人たちと共に、40年ぶりに火入れを復活しました。町田工業(中之条町)の参画を得て、文化財の屋根用などに上ノ原の茅を供給する仕組みでもできました。

かつて200ヘクタールもあった上ノ原の茅場(ススキ草原)も、現在残るのは10ヘクタールほど。貴重な自然です。草原を歩き、上ノ原の来し方、未来への残し方を想っていただければ幸いです。

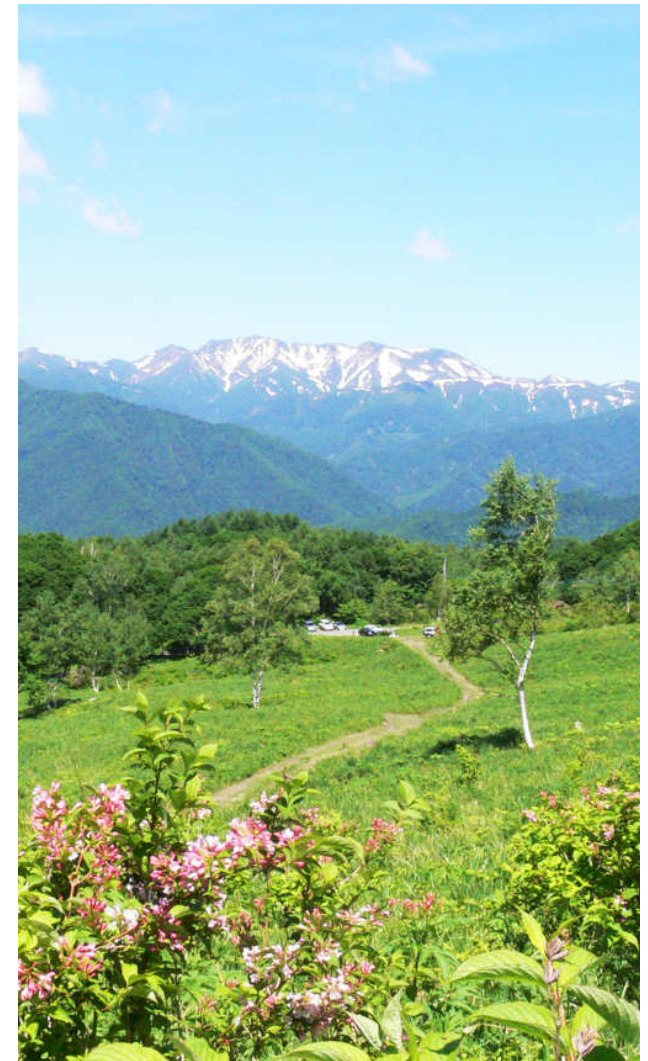


フットパス 上ノ原 群馬県みなかみ町藤原
企画・制作 森林塾青水
編集協力 藤原案内人クラブ・地元有志・森林文化協会
発行 森林塾青水／東京都中央区湊1-2-3 プロスペリテ
八丁堀301 森林塾青水事務局・コミュニティデザイン
TEL:0278-62-2111 info@commonf.net

2012.10.15

上ノ原 フットパス

群馬県みなかみ町藤原



森林塾青水

